



千葉県

# 加藤 進さん(西台)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：10月14日

## いつか浪江に帰りたい

釣りが趣味で、浪江にいる時は夫婦二人で、近くの高瀬川によく「アユ釣り」に出かけたという加藤さんご夫婦。今は、長男ご夫婦とお孫さんたちと6人で、千葉県野田市で暮らしています。



▲愛車といっしょに



▲加藤進さん、壽美子さんご夫婦

■震災の日  
未曾有の大災害と原子力事故から、早いもので4年6か月が過ぎました。あの日、私たち夫婦は二人で居間でテレビを見ていました。突然のすごい揺れと地鳴りの音に、無我夢中で外に飛び出しました。地震がおさまって家に入るとタンクや食器棚が倒れ、あちらこちらにガラスの破片が散乱し、足の踏み場もありませんでした。翌朝、防災無線が鳴り、「福島第一原子力発電所で異常事態が発生した

■知らない土地での暮らし  
ここでの暮らしも4年になり、最初の一年間は、知らない土地で近隣の方たちのお付き合いもほとんどなく、ストレ

ので、ただちに津島地区の活性化センターに避難」と聞き、着のままで避難しました。しばらくの後、今度は原子力発電所の建屋が爆発、川俣小学校への避難指示が出されました。道路は渋滞、ようやく小学校に着いたころは、夕暮れ時でした。役員職員から段ボール一枚と毛布一枚を渡され体育館の中に入ると大勢の人が避難していました。夜になると犬の啼く声や犬の飼い主に「出ていけ」と怒鳴る声が聞こえ、床の冷たさや寒さもあって一睡もできませんでした。私も以前、犬を飼っていたので、泣く泣く体育館の外に犬を連れ出した人のことが他人事に思えませんでした。動物も家族と一緒になんです。残念でなりません。

■いつか浪江に  
いつかは、浪江の自宅に帰りたいですね。近くを流れる高瀬川に、夫婦でアユ釣りをしに、よく出かけました。千葉に来てからも、幼稚園の送迎がない日曜日には、夫婦で釣りに出かけたり、東京の博物館に出かけたりしています。浪江とは風景が違います。山があり、川があり、海があり、自然の豊かさに囲まれた暮らしと今の暮らしでは各段の違いがあります。後ろ向きの気持ちになると、どんどん落ち込んでしまします。いつか帰るんだと自分に言い聞かせながら、今の暮らしを楽しみたいと思います。

# 浪江のこころ通信

・第54号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

## 再取材シリーズ 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から4年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

## 「浪江のこころ通信／第54号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243(22)4218





## 高橋 正俊さん・美恵子さん(赤宇木)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木  
取材日：10月20日

### 生きていく上での怖さやリスクはあるけど、 楽しいこともある。それを活かしてやっていくよ

「もう一遍福島でやっていたことをやろう」。避難中にそう思い、たどり着いた北の大地、北海道置戸町。もともと動物を育てて生計を立てようと、福島では放牧牛を飼っていた正俊さん。その経験をもとに置戸では山羊を飼い、大自然に囲まれた生活を奥様の美恵子さんと一緒に始められました。



▲お二人にすっかり懐いている山羊たち  
▶2年がかりで建てたお住まい。敷地の左手奥にはプライベートゲレンデが広がる



■ご縁やタイミング  
みな上手く合ったんだね  
震災があつて避難して、伝手を頼りに仮住まいしていたけど、人の家なので何にもできなくてだんだん嫌になってきたんです。それならもう一遍福島でやっていたことをやろう!と思ひ、同じ位の土地を探して日本中回ったんです。福島では十町歩の土地で牛を飼っていました。補償もはっきりしていませんでした。安くても買えるかわからない。安くて広い所は見つからず、最終的には北海道だろうと。

夏に一度北海道に行った時に知り合いができて、冬にその知り合いを頼って、2月の一番寒い時に1か月間、上士幌町がやってい

■山と川があるから  
この土地は私の趣味と合うようです。3月に解禁になる溪流釣りはゴム長にカンジキをはいて谷へ入ります。4月から6月までは岩魚やまべ釣りと山菜とりで山や川を走り、夏は鮎釣り、秋はきのこ採りです。こちらではきのこを「こけ」、コシアブラを「コンテツ」、根曲がり竹を「姫竹」、シドケのことを「やぶれがき」といいます。山菜は保存しておいて漬物にしたり、親戚や友達にあげて喜んでもらったりしています。私には一年があつたという間に過ぎてしまいます。



## 吉田 亀雄さん(樋渡)

取材者：NPO法人たすけあい遠州 稲葉  
取材日：11月1日

### 自分らしく 健康に過ごしたい

飛騨市の雇用促進住宅に避難されている吉田さん、休日は山菜とりや溪流釣りをするなど、自然ゆたかな暮らしを全身で楽しんでいます。



▲吉田さんの自宅取材中  
(もう、こたつが入っていました)

震災後の3月19日、妹夫婦が住んでいる岐阜へ避難しました。兄の家族と一緒に津島、川俣、三春と避難の途中、妹夫婦から連絡が入って、こちらへ来ました。その後、5月から食品会社のパート社員として仕事をしています。月曜から金曜まで仕事で土日は休みです。「会社からもいい」と言われるまで働こうと、同じ年の同僚と話しています。

■浪江のこと  
浪江には年に2回のペースで行っていました。車で6時間かけて二本松の友人の処へ一泊(彼は会社の仲間震災の日一緒に伐採の仕事をしていました)。翌日、彼とパークゴルフをしてから浪江に入ったことも

■住めば都です  
飛騨は秋は紅葉、春は新緑がいい。冬はマイナス2桁になることもあるけど、住めば都です。飛騨は観光地で温泉もあり、新穂高ロープウェイで山に上ると、北アルプスの山々が目に入り迫力満タンで迎えてくれます。高山市は春と秋に豪華絢爛な山車が街中を回ります。古川の起し太鼓祭り、相馬馬追と同じで雨が降ってもやりませぬ。妹が車で5分のところにいるのでよく来てくれるし、妹の夫は趣味が同じで一緒に出かけます。浪江の復興を待っています。避難指示が解除されたらまた行ってみたいと思っています。



浪江大吉SSB チームおとし鳳 小荒井雅治さん(権現堂)  
浪江大吉SSB チームらん蘭 島田 有紀さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 結城  
取材日：10月4日

この時ばかりは何もかも忘れ熱中できます  
私たちにとっては年1回の栄養ドリンクです

雲一つない秋晴れのもと、10月4日に山形県高島町にて高島町総合体育祭・ソフトボールの部が開催され、『浪江大吉SSB』のメンバーに助っ人選手を加え、浪江町から2チームが出場しました。チーム代表が高島町へ避難したことがきっかけで出場を始めた大会も今年で5年目。若手のメンバーも増え、着実に次の世代へ受け継がれています。「何十年先も若手が継承し、続いていけるチームに成長してほしい！」そんな熱き思いを語った若手のホープ島田さんと、静かにチームの成長を見守ってきた、先輩の小荒井さんにお話しを伺いました。



▲小荒井雅治さん



▲島田有紀さん

◆大会に対する思い、チームへの思いは？

**小荒井** 去年は仕事の都合で参加できず、2年ぶりの参加です。今年は何としても出たかったので、会社で「この日だけはお休みをください！」と事前にお断りして駆けつけました。チームメイトとは久しぶりの再会ですが、新しいメンバーも増えて活気を感じます。今回は若手も多く、頼もしい限りです。常に全力投球の若手には元気がもらえます。今日はメンバー混合で、即席で2チームを作りましたが、みんなスポーツマンなので、呼吸を合わせ即座に連携できている。エースは本日も休みですが、精一杯頑張ります。高島大会では、優勝とか結果にこだわらず、お互い交流を図り、とにかく楽しむことが大切だと思っています。

**島田** 今回で5回目、2011年の初年度から、休まず毎年参加しているので皆勤賞だと思います。今年は、2チームの中の1つの監督という大役を仰せつかったのですが、この日のために仕事をやり繰りし大会に臨みました。試合は「とにかく楽しく、ムードづくりをし、皆の気持ちを盛り上げたいです。自分が任せられた「チーム蘭」は20代の若手が多く、遠く千葉県や神奈川県から駆けつけてくれました。自分も18歳の時にチーム代表の松崎さんとのご縁で加入しました。相馬、二本松、水戸など5チームに所属していますが、地元という理由で、浪江SSBが一番思い入れも深いですね。これから先も若手が継承し、続いていける永久不滅のチームになってほしいと思っています。このチームに出会えたおかげ



▲チームメンバーとSSBガールズ

◆高島町への感謝

**小荒井** 毎年この季節になると、「ソフトボールの時期が来たなあ」と、とても楽しみにしています。大会出場は5年目に入りましたが、高島町には毎年受け入れていただいて本当に感謝しています。高島の方は温かいですね。昼食やおみやげなど、毎回おもてなしをいただいています。

で、友人もたくさんできました。メールなどで連絡を取り合っているときが楽しいですね。共通の話題でつながっている人とは話も盛り上がりやすい。スポーツを通じた交流は、仕事では味わえない、自分にとってかけがえのないものになっています。

**島田** 毎年この大会に招いてくれる高島町へは、感謝の気持ちでいっぱいなんです。いつかは恩返しをしたいですね。この大会へ橋渡ししてくれた居酒屋大吉の店長へも、いつもありがとうございます。言いたいです。

◆ふるさとへの思いは？

**小荒井** 自分にとって、ふるさととはかけがえのないもので、何かにつけて思い出します。浪江が消えてしまうのではない心配です。戻りたい気持ちはないですが、ようやく今の生活に慣

れ、段々と気持ちが薄れてきたかもしれません。今の地域にもなじみ、知り合いも少しずつ増えました。帰還への思いは人それぞれ。若い人は自由に動けませんが、お年寄りも早く戻りたいのではないのでしょうか。震災後、郡山市で再就職し、ゼロからのスタートをしました。最近「まずは避難先で仕事や生活基盤づくりを頑張ろう」という思いが強いです。厳しい現実で生きている中、高島ソフトボール大会は年一回の栄養ドリンクのようなものです。この時ばかりは何もかも忘れ、ソフトボールに夢中になれる。

**島田** ふるさと浪江のことは片時も忘れたことはありません。思い出もたくさん詰まっています。やはり地元が一番です。大学時代も浪江から二本松に自宅通学をしていました。今は仕事の都合で郡山市に移り住んで2年目になります。両親は避難のため二本松市に離れていますが、元気に暮らしています。家族内では、帰還のことや自宅のことなど、浪江の話が尽きません。10月31日に浪江町でソフトボール大会があり、地元に戻れるのを今から楽しみにしています。

お世話になった方々からメッセージをいただきました

●高島町ソフトボール協会 会長 菅野康雄さん

本日は遠方よりようこそお越しくださいました。毎年、選手たちには大会を盛り上げてもらい大変ありがたく思っています。高島町の選手たちにも良い刺激になっています。高島町は夏場が暑く、冬は雪深いため、避難されてきた方々も大変だったと思います。ここにいる選手たちは自然とけ込み、こちらの風土にもすっかりなじんでいる感じです。10月31日の大会へのご招待のお話を伺い、とても光栄であり、ありがたく感じています。再会を楽しみにしております。

●高島町体育協会 会長 菊地秀徳さん

ようこそ高島町へ。遠方よりお越しいただきありがとうございます。浪江の選手たちには、町総合体育大会(ソフトボール)を毎年にごやかにしてもらい本当に助かっています。今年で2・3回目となりますが、初年度より違和感なく盛り上げてもらっています。今年は2チームで編成していただき、県外各地からお集まりいただいたようです。掛け声もはつらつとしていて、我々も逆に元気をもらっています。また来年もお会いしたいですね。お待ちしております。



左が菊地秀徳さん、右が阿部高士さん

菅野康雄さん

●浪江町ソフトボール協会 会長 阿部高士さん

毎年この時期に浪江の選手たちが参加させてもらい、とても感謝しています。芋煮の振舞いやお米の贈呈など、選手たちが楽しめるような細やかな気配りもありがたいですね。避難当初は「これからどうしよう」といった状態だったと思うが、ソフトボールを通して元気をもらい、避難によるストレス解消にも役立ったと聞いています。10月31日には浪江町で協会主催の大会を開催しますが、これまでの感謝を込めて、高島町のチームをぜひご招待申し上げたい。浪江町で再会できるのを楽しみにしております。